

郷土研通信



オヒョウニレ

アイヌ語：アヒニ（屈斜路）
樹皮を晒して繊維にし、衣服（アツン）等に加工した。

発行：てしかが郷土研究会（Teshikaga Regional Studies Association）
北海道川上郡弟子屈町中央3丁目2-10（松橋方）

文章責任：松橋 秀和

近況報告

弟子屈フォトコンテスト

最優秀賞に輝く

第15回弟子屈フォトコン

テスト（審査委員長・水越武氏）
で、山本悦子（ふるさと歴史館

学芸員）さんの作品「大地の

彩（いろどり）」が最優秀賞で

入選されました。

色の変化の切取りに専門

が「美術」であるだけにそ

の感性が秀逸です。

「ひなまつり展」を開催

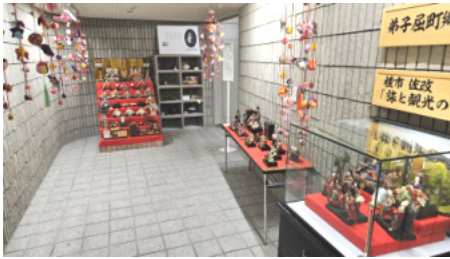
ふるさと歴史館の企画展

示で「みちくさつるし雛の

会」の協力で2月14日から

3月2日まで開催されてい

ます。



獅子頭を拝見

菊地 所員が

てい

るし

の

存

子

舞

の

保

存

の

傷

つ

て

き

ま



獅子頭が、長年の使用で傷

んだところの補修が終わり

てきた、とのことで例会で

拝見することができました。

演舞を見ることはありません

でしたが、耳や目玉が動くこ

となど獅子頭の構造を菊地

会員が説明してくれました。

郵便局風景印集発行予定

以前に情報提供していま

し、釧路管内郵便局（67局）の

風景印の印影と各郵便局区内

の地域を紹介した冊子（表題名

は不詳）が3月中に発行される、

とのこと。前田会員も執

筆されているようですので、

発行が待ち遠しいです。

図書館の郷土資料の

所管替えの要望書提出

先月の例会で提案した「図

書館の郷土資料の所管替えの

要望書」を2月2日に教育長

と面会して手渡ししました。

教育長からは「中心市街地

構想の本体工事の入札が終
り、施設の運営方法等につ
いてはこれから詳細を詰め
ていくことになる。その中
で要望についても検討する
材料になると思う」とのこ
とでした。

勉強会

更科源藏著

「原野シリーズ」に弟子屈を読む

『おさない原野』

講師 松橋秀和氏

小説に描かれている、明
治30年代に弟子屈へ移住し
てきた農民がどのような生
活していたか解説された。

次回の例会

令和八年三月二五日（水）

一九〇〇

ふるさと歴史館

勉強会

更科源藏著

「原野シリーズ」に弟子屈を読む

『少年たちの原野』

講師 松橋秀和氏

むかしむか史写真館

No. 363

「弟子屈小唄」は二つあった

小林 俊夫

一つ目の「弟子屈小唄」は、弟子屈町史第二巻（昭和56年）の最終項「付録」欄の「その二 歌謡」に掲載されていますが、作詞作曲、発表年月日は書かれていません。

弟子屈小唄

- (1) 霞む弟子屈ほのぼの明けて
風がもつてくる湯華の香り
川湯恋しや情に濡れて
- (2) つきぬ摩周湖 涙雨
燃ゆる心をつつじに染めて
深き思いは屈斜路の湖に
だれに硫黄かわたしの胸に
温泉乙女の瞳は悲し
- (3) 積る苦労はだれ白雪の
消ゆる思いの阿寒岳よ
袖に包んだ麓の湖に
うつる姿に ついほろり

発見！更科源藏氏の作詞

二つ目の「弟子屈小唄」は、『開村五十年 製糖工場



『開村五十年 製糖工場新設・標茶記念誌』（昭和十一年）

新設・標茶記念誌』（昭和十一年）の239頁に掲載されています。

この記念誌は、高橋虎氏（釧路市在住）編集で、自費出版されたものです。また、次頁には「弟子屈小唄解説」は掲載されています。

この「弟子屈小唄」の作詞は更科源藏氏ですが、更科氏の全作品を収録した小野寺克己著『更科源藏書誌』に掲載されておらず、『弟子屈町史』第一巻にも掲載さ

れていません。さらには他の関連資料を探しましたがまだ見つかっていません。

作曲は高館恒三郎氏となっています。高館氏は南弟子屈駅の初代駅長です。標茶から弟子屈まで釧網線が昭和4年8月15日に開通しており、その頃に就任（昭和4年8月〜昭和6年3月）しています。更科氏は折しも昭和4年9月まで昭栄尋常小学校の代用教員として勤めていて、高館氏とは共に同じ地域に住んでいた時期と重なっています。この頃に「小唄」が出来上がったと推測できます。

高館氏がどういう経歴の人物か不明ですが、音楽に詳しい人物であることが伺えます。しかし、「小唄」を作った経緯は分かっています。

この記念誌には「小唄」の歌詞に「解説」が記載されているのが特徴で、更科氏の配慮とみられ、らしさが感じられます。

森川勇作著『原野の中の更科源藏』の143頁に「電燈が灯くのは、あと三年は

弟子屈小唄

更科源藏・作詞
高館恒三郎・作曲

いでゆ燃やし一夜の夢も
にくや弟子屈朝たつ煙
ふれやピラオの線の雨
締めてしんみり弾ふもの

カムイヌブリの影草は
山の乙女か神祕の霧か
波もカムイの鳥根にそうて
何を語るかひそひそと

行ふか當別牧場を越えて
けむる山影湯瀧のほとり
いつも思ひのアノ黒髪に
チラリホラリと花が散る

川湯湯煙心にしめて
アトサヌブリのつつじは今か
かすむ硫黄の煙の中で
乙女心のジ（イ）ソツツジ

山の緑か太鼓（太古）の色か
湧いて流るる和琴の風呂に
つる思ひを湯砂に書いて
降るな藻琴に立つ霧りよ

波も静かにコタンがぐれて
イビレなくなよメノコがかなし
昔語りのオプタテシケに
北斗七星がキラキラと

かかるからラヂオはない。
「弟子屈小唄」は電蓄（筆者註：蓄音機）でひろがった。

「…」と書かれています。
ということは、一つ目の「弟子屈小唄」にはレコードがあつたということになります。

一つ目の「弟子屈小唄」

弟子屈小唄解説

ピラオ
ピラオー原名ピラオロ
（崖の終りの意）

カムイヌブリ
摩周岳（神の山の意）
カムイ

ここではカムイシユ、
摩周湖の中島
（神になった老婆の意）

アトサヌブリ
硫黄山（裸山の意）
コタン＝部落
イビレ＝仔熊

オプタテシケ
山の名（槍がそれた意）

にも何かの音源があるように想えます。この二つの「弟子屈小唄」に心当たりのある方がいらつしやいましたらご一報を頂ければ幸いです。

なお、この「記念誌」は、別件で標茶町史編さん室を訪問した際にお借りして調べていたところ偶然発見したものです。こういうところに弟子屈に関する歴史が隠れていることに、改めて認識しました。

（おわり）